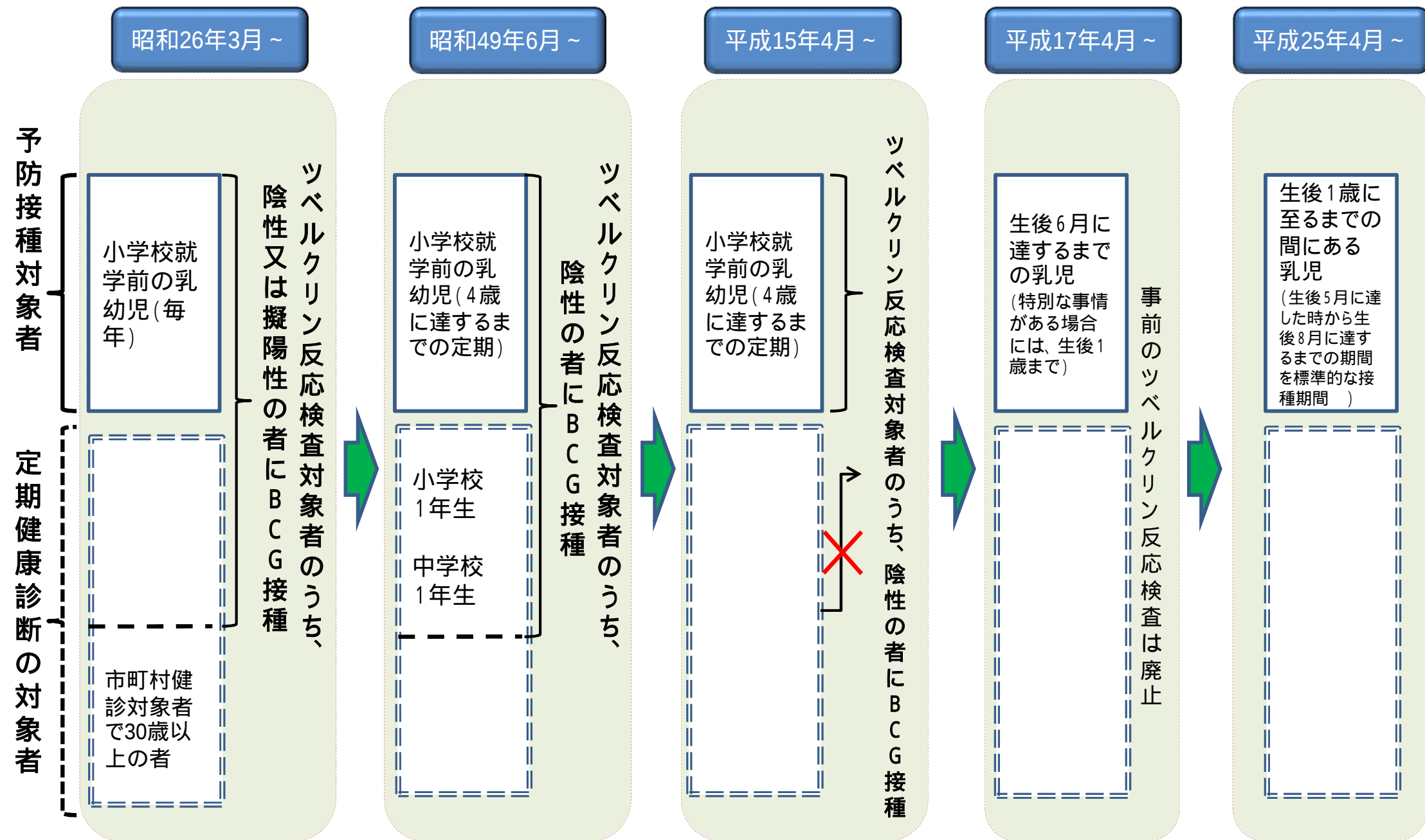


結核に関する特定感染症予防指針について ～ BCG接種(小児結核対策)～

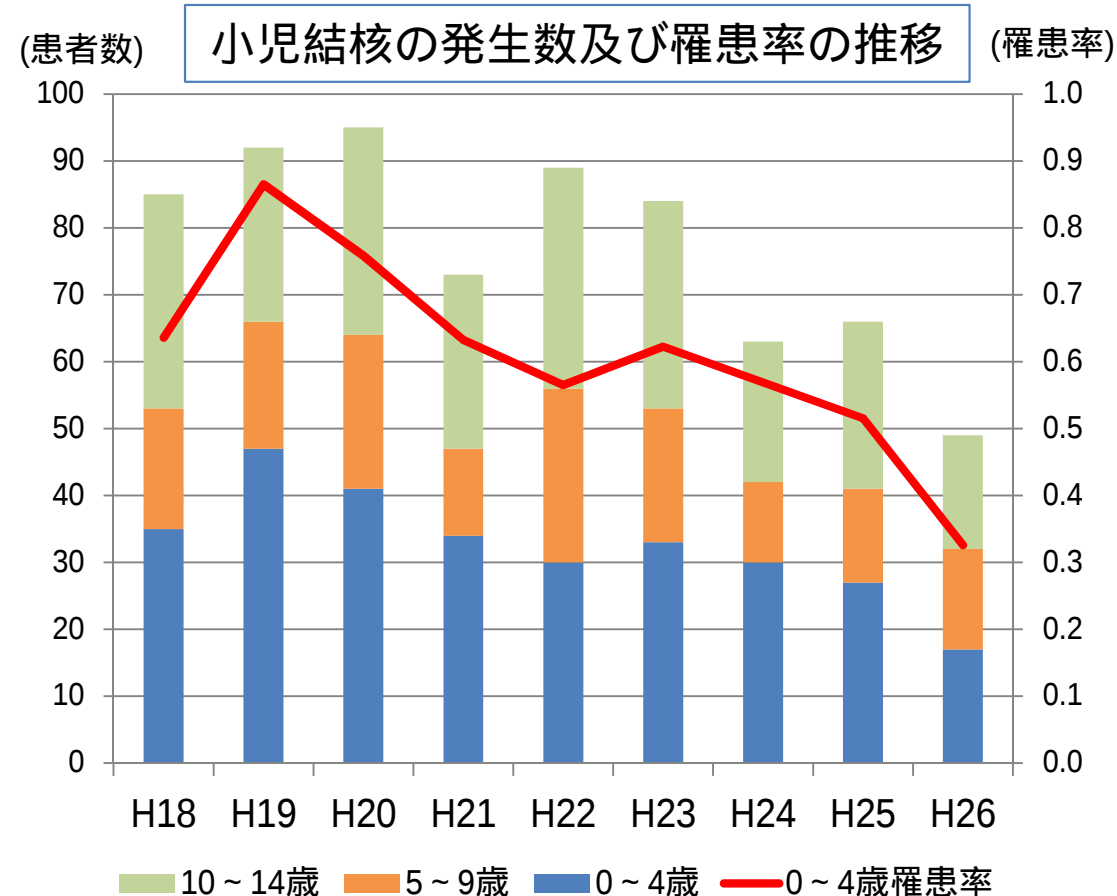
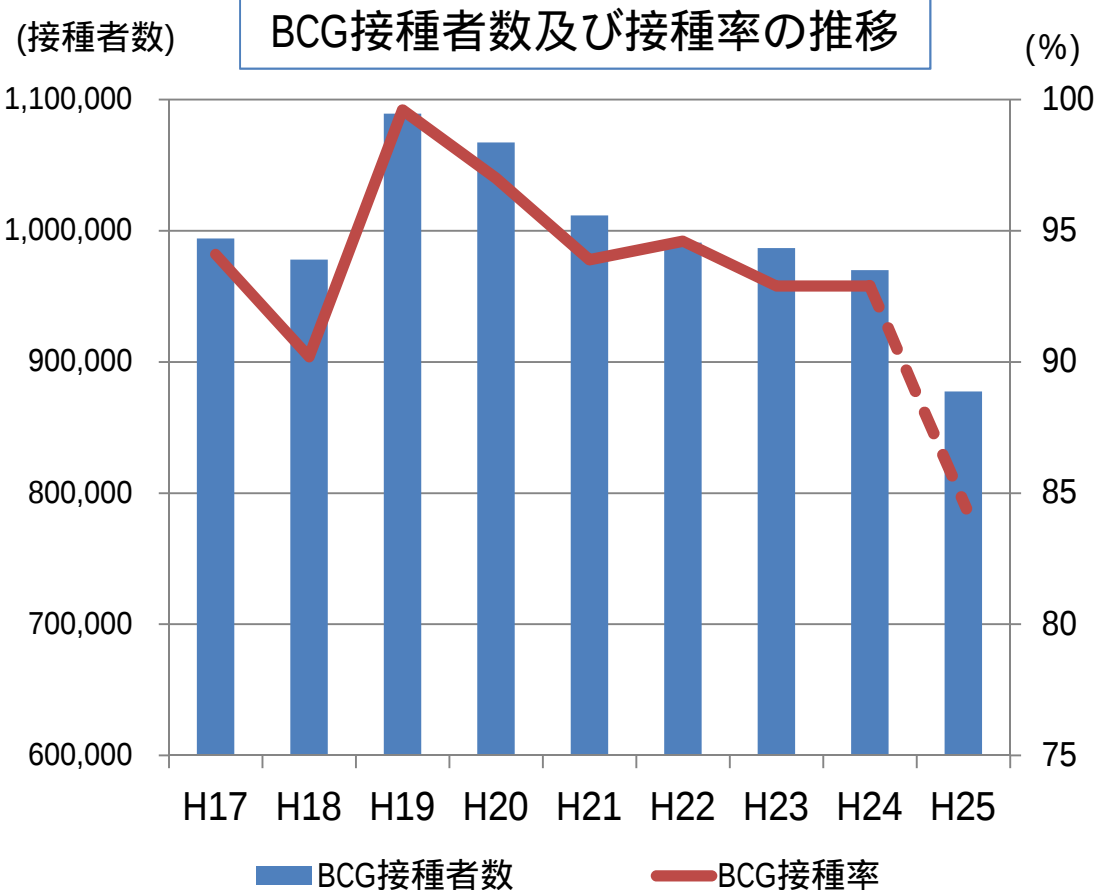
ツベルクリン反応検査・定期BCG接種制度の変遷



結核の発生状況等市町村の実情に応じて、上記の標準的な接種期間以外の期間に行うことも差し支えない。¹

BCG接種率及び小児結核の発生数の推移

接種時期を変更する前のBCG接種率は、目標(95%以上)には達していないが、概ね高い接種率を推移しており、小児結核の減少に寄与していると考えられる。



出典：厚生労働省予防接種情報「定期の予防接種実施者数」

接種率は、各年度でBCG接種を受けた人数を、接種対象(満1歳まで)に該当する人口推定値で除したもの。25年度は、標準的接種時期を後ろに変更した年度であるため、接種率が見かけ上、低くなっている。

出典：厚生労働省結核登録者情報調査年報集計結果

BCG接種後の骨炎・骨髄炎（副反応）の発生状況について

(H27.3.11)
第5回結核部会資料

● 過去9年の医療機関からの副反応報告件数（月齢及び年齢は接種時の患者の年齢）

報告年度	17年度	18年度	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度	25年度 (うち平成25年度 に接種されている もの)
骨炎、骨髄炎	1	4	2	9	2	5	7	6	10(1)
3月		1	1	7	1	1	5	1	3(0)
4月		1		2	1	4	2	3	4(0)
5月								2	2(1)
6月									
7月									
8月		1							
1歳		1							
不明	1		1						1(0)

企業からの報告については、接種時月齢の報告がないため計上していない。

● 過去9年の健康被害救済認定件数（年度は疾病障害認定審査会で認定とされた年度、年齢は接種時の年齢）

	17年度	18年度	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度	25年度
骨炎、骨髄炎		1	2	2	6	7	7	8	4
1～3月齢				2	4	5	5	6	2
4～6月齢		1			2	2	2	2	2
6～11月齢			1						
1歳			1						
2歳以上									

平成25年度の認定については、全て平成24年度以前の接種症例

(参考) 過去8年間のBCG接種者数(単位:千人)

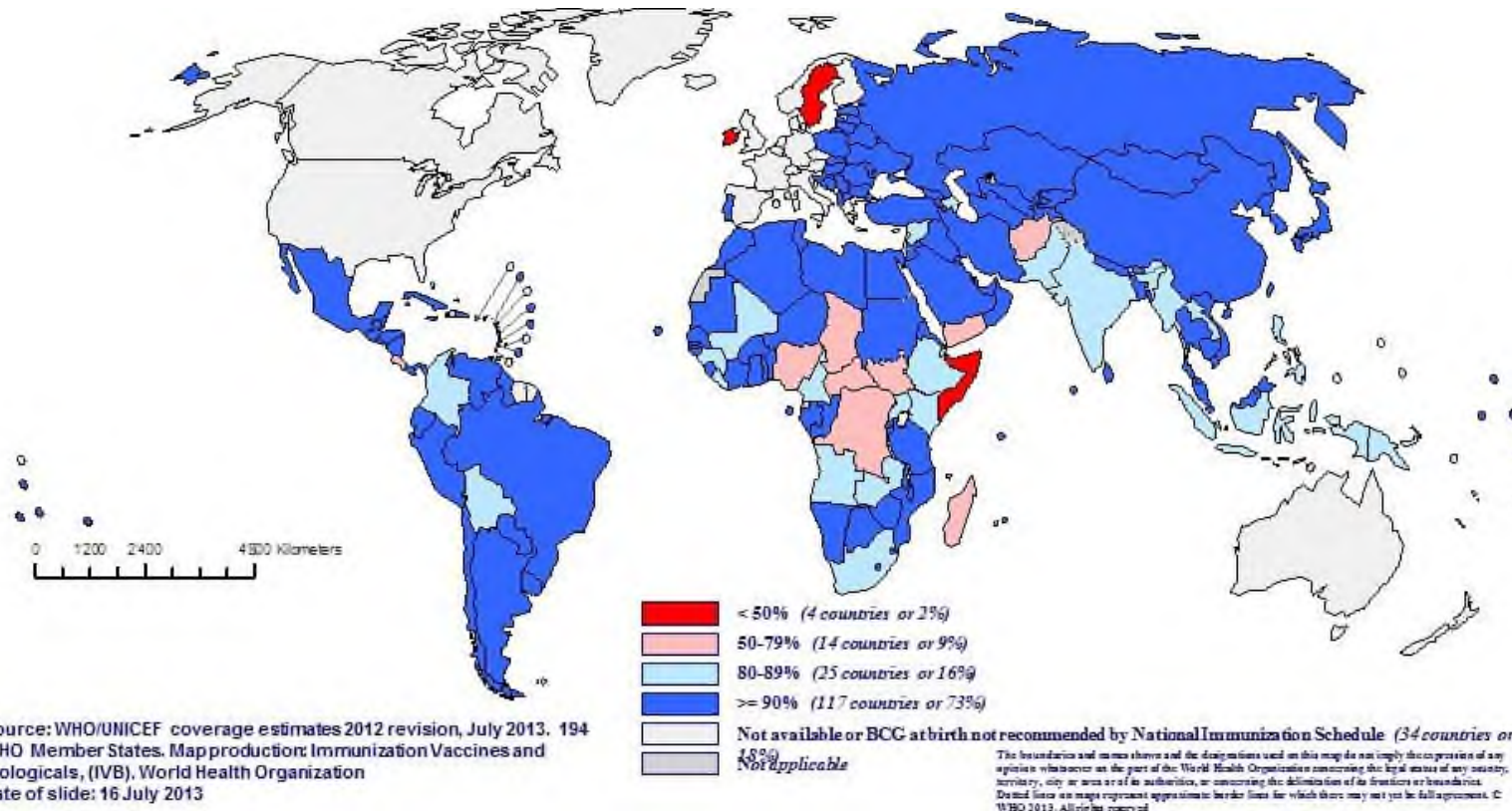
	17年度	18年度	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度	25年度
乳幼児(1歳未満)	994	978	1,089	1,067	1,015	991	987	970	-

平成25年4月に接種時期を
生後6月未満から1歳まで(標準的には生後5～8月)に変更

海外のBCG接種の状況

世界のほとんどの国において、ある年齢の全員に対してBCGを接種している。ただし、一部の国ではBCGの接種対象者を、高まん延国出身者や家族に医療従事者がいる児などのハイリスク者に限定している。

Immunization coverage with BCG at birth, 2012 (出典:WHO)



ある年齢の全員に対してBCG接種を実施していない国の例
(2014年罹患率)

- アメリカ (3.1)
- カナダ (5.2)
- フランス (8.7)
- オランダ (5.8)
- デンマーク (7.1)
- オーストラリア (6.4)

(罹患率の出典:
Global Tuberculosis Report 2015)

国際結核肺疾患連合(IUATLD)によるBCG接種の中止を検討する基準(1994年)

- 塗抹陽性肺結核罹患率が過去3年間にわたり5/10万以下 6.0/10万(2014年)
- 5歳以下小児の髄膜炎罹患率が過去5年間1/1000万(総人口) 1/1000万を下回る
- 年間感染危険率(未感染者が新たに感染する割合)が0.1%以下 1980年頃に0.1%を下回る

BCG接種・小児結核について

現状

- 平成24年まで、BCG接種は「生後6月に達するまでの乳児(特別な事情がある場合には、生後1歳まで)」を対象に定期接種を行い、接種率は目標とする95%に達していないが、高い接種率であった。
- 平成25年から、BCG接種の対象を「生後1歳に至るまでの間にある乳児(生後5月に達した時から生後8月に達するまでの期間を標準的な接種期間)」へと変更した。
- BCG接種の副反応は、年度を超えて発生することがあるため、接種時期変更の影響は、副反応報告等から評価することとなっている。
- 海外においても、小児結核対策としてほとんどの国でBCG接種が行われているが、一部の国において、BCG接種の対象をハイリスク者に限定している。
- 新規小児結核患者は年間100例未満で、減少傾向であり、研究班において小児事例の広域的共有がなされている。

課題

- 今後の低まん延国化に伴い、我が国も将来、定期のBCG接種の中止または選択的接種に移行する時期が来ると考えられる。

提案

- 将来の低まん延状態を見据えて、定期のBCG接種の中止または選択的接種の導入に関する検討に必要な研究を進めることとしてはどうか。